

がんで逝った医師 思い継ぎ10年

患者やかかわる人たちの「安息の場」を地域に

がん専門の医師が、がんになった。「がん患者が孤立せず、その人らしく過ごせる場、がんにかかわる人たちが出会える場をつくらう」。医師の愛称を冠した拠点「金沢市で生まれて10年になる。病院でも自宅でもない「安息の場」を地域に根づかせる試みだ。



兼六園近くにある「元ちゃんハウス」。ギャラリ、サロンなどのスペースがあり、がん患者だげでなく、家族、遺族、医療従事者らに無料で開放している。

がん治療の見通しや日常生活、人間関係など、患者たちの不安や悩みはさまざまだ。元ちゃんハウスでは医師、看護師、管理栄養士ら専門職のほか、がんの経験者にも相談できる。同じ立場の人やスタッフと語り合い、料理、栄養、ヨガなどの教室も開く。

生みの親は、金沢大出身で大腸がん専門の外科医・西村元一さん。金沢

金沢「元ちゃんハウス」



「元ちゃんハウス」3階のサロンは落ち着いた内装。ソファに座る西村詠子さんのそばに、壘の小上がりもある。いずれも金沢市石引4丁目

遺族にも寄り添い「ケアの循環を」

赤十字病院の副院長だった2015年3月に胃がんが見つかり、「余命半年」と告げられた。

以前から、西村さんは「どうしたら医師とがん患者との距離を埋められるか」を考えていた。10年に英国の支援施設「マギーズ・キャンサー・ケアリング・センター」を知った。「金沢にもマギーズのような場所を」と啓発活動を始め、がんの



亡くなる半年前、「元ちゃんハウス」の前でオープンにあいさつをする西村元一さん。2016年12月1日

影響を受ける人が無料で使える英国のセンターも視察した。

その矢先、がん患者になった。患者の揺れる心情を初めて実感し、自分の役割と目標を深く考えた。そんな変化を、西村さんはあえて「キャンサー・ギフト（がんからの贈り物）」と表現した。

医療ケア用品販売会社から旧社屋の無償提供を受けた。NPO法人・がんとむきあう会が運営する形で16年12月1日、元ちゃんハウスができた。

北陸3県でも、がん診療連携拠点病院などに相談窓口があるが、16年10月に生まれた「マギーズ東京」とともに、がん患者や家族を支える民間の常設拠点として先駆的な存在になった。

半年後の17年5月31日、西村さんは58歳で旅立った。むきあう会の理事長を夫から継いだ妻詠子さん(67)は元看護師で、がんになった経験もあり、夫の闘病を支え続けた。「私の居場所として、元ちゃんハウスを残してくれたのかもしれない。多くの方々に支えられた」

昨年度の利用者は患者、家族、医療従事者ら

2168人。今年度から遺族を対象に新たな取り組みを進める。日本対がん協会が助成する「希望をともに育むプロジェクト」に採択された「もくれんぶらす」だ。

5月23日、初回のイベントが元ちゃんハウスであった。島蘭進・東京大名誉教授(宗教学)が「死に向き合って生きる」と題して語りかけ、元ちゃんハウスに通う遺族も耳を傾けた。

中山明美さん(69)は21年、卵巣がんで息を引き取った娘(当時44)の髪を病室で洗った。リンスの香りを思い出し、今もシャワーを浴びると涙が止まらないという。「そんな気持ちをごこで受け止めてもらっている。いつかは誰かの悲しみを支えてあげられたら」

イベントで司会をした詠子さんも「遺族の方々が心のケアを学び、『ケアの循環』が生まれれば」と話す。「でも、結果は追い求めない。患者さんの悩みと同じように、遺族の悲しみも人それぞれで、癒やされるものではないから。『どなたでも気軽においでください』という思いだけは変わりません」(櫻村伸哉)

「死に向き合って生きる」と題して語りかけ、元ちゃんハウスに通う遺族も耳を傾けた。

中山明美さん(69)は21年、卵巣がんで息を引き取った娘(当時44)の髪を病室で洗った。リンスの香りを思い出し、今もシャワーを浴びると涙が止まらないという。「そんな気持ちをごこで受け止めてもらっている。いつかは誰かの悲しみを支えてあげられたら」

イベントで司会をした詠子さんも「遺族の方々が心のケアを学び、『ケアの循環』が生まれれば」と話す。「でも、結果は追い求めない。患者さんの悩みと同じように、遺族の悲しみも人それぞれで、癒やされるものではないから。『どなたでも気軽においでください』という思いだけは変わりません」(櫻村伸哉)

「死に向き合って生きる」と題して語りかけ、元ちゃんハウスに通う遺族も耳を傾けた。

中山明美さん(69)は21年、卵巣がんで息を引き取った娘(当時44)の髪を病室で洗った。リンスの香りを思い出し、今もシャワーを浴びると涙が止まらないという。「そんな気持ちをごこで受け止めてもらっている。いつかは誰かの悲しみを支えてあげられたら」

イベントで司会をした詠子さんも「遺族の方々が心のケアを学び、『ケアの循環』が生まれれば」と話す。「でも、結果は追い求めない。患者さんの悩みと同じように、遺族の悲しみも人それぞれで、癒やされるものではないから。『どなたでも気軽においでください』という思いだけは変わりません」(櫻村伸哉)

「死に向き合って生きる」と題して語りかけ、元ちゃんハウスに通う遺族も耳を傾けた。

中山明美さん(69)は21年、卵巣がんで息を引き取った娘(当時44)の髪を病室で洗った。リンスの香りを思い出し、今もシャワーを浴びると涙が止まらないという。「そんな気持ちをごこで受け止めてもらっている。いつかは誰かの悲しみを支えてあげられたら」

イベントで司会をした詠子さんも「遺族の方々が心のケアを学び、『ケアの循環』が生まれれば」と話す。「でも、結果は追い求めない。患者さんの悩みと同じように、遺族の悲しみも人それぞれで、癒やされるものではないから。『どなたでも気軽においでください』という思いだけは変わりません」(櫻村伸哉)